青木尚佳（ヴァイオリン）

1992年東京生まれ。3歳でヴァイオリンを始める。
桐朋学園大学音楽学部ソリスト・ディプロマ・コースに最年少で合格し、同コースで幼少期から学ぶ堀正文に師事。
2011年英国王立音楽大学に留学し、卒業時には全卒業生の中から男女各1名ずつに贈られるタゴール・ゴールド・メダルをチャールズ皇太子より授与された。
その後、英国王立音楽院で藤川真弓に、ミュンヘン音楽大学でアナ・チュマチェンコに師事。
2004年に第5回若い音楽家の為のチャイコフスキー国際音楽コンクールで最年少ディプロマを授与されたの皮切りに数多くのコンクールで受賞。
2014年にはロン・ティボー・クレスパン国際コンクールで第2位となり、あわせて協奏曲の最良の解釈に贈られるモナコ大公アルベール2世賞を受賞。
同コンクール入賞後、本格的な演奏活動を開始。浜離宮朝日ホール、東京・春・音楽祭を始めとする各地でのリサイタル活動、
N響、東響、札響、東京シティ・フィル、仙台フィル、大阪フィル、大阪響、兵庫芸術文化センター管など各地のオーケストラとの共演で高い評価を得ている。
2018年4月にはフォンテック社よりデビューCDをリリース。2021年1月、ミュンヘン・フィルハーモニー管弦楽団のコンサートマスターに就任。

三井静（チェロ）

ミュンヘン・フィルハーモニー管弦楽団チェリスト。
第 9 回泉の森ジュニアチェロコンクール金賞。第 20 回日本クラシック音楽コンクール最高位。
第 80 回日本音楽コンクール第 3 位。第 15 回東京音楽コンクール弦楽器部門第 2 位。
エンリコ・マイナルディ・チェロコンクール（オーストリア）第1位。ジョルジュ・エネスコ国際コンクールチェロ部門入賞。
2010 年から 2013 年まで（財）ヤマハ音楽振興会より、2013 年から 2015 年まで日本演奏連盟より
、2015 年から 2017 年まで公益財団法人ロームミュージックファンデーションより奨学支援を受ける。
2017 年から 2018 年にはルイ・ヴィトン財団の奨学生に選ばれ"Classe d'Excellence de Violoncelle de Gautier Capuçon"に参加。
演奏会などの様子が mediciTV にて配信されている。2018 年から 2019 年まで文化庁の研修生としてザルツブルク に留学した。
室内楽やオーケストラの活動にも積極的に取り組み、ゴーティエ・カプソン、クレメンス・ハーゲン、五嶋みど り、徳永二男、篠崎史紀の各氏ら
著名な演奏家と室内楽で共演し、2011 年から 2012 年までN響アカデミーに在 籍。
これまでにチェロを岩井雅音、毛利伯郎、ジョバンニ・ニョッキ、クレメンス・ハーゲンの各氏に師事。桐朋学園大学ソリストディプロマコースを経て、
ザルツブルク・モーツァルテウム大学在学中にミュンヘン・フィ ルハーモニー団員となる。

大井駿（ピアノ）

1993年東京生まれ。
パリ地方音楽院ピアノ科、カステルフランコ・ヴェーネト音楽院ピアノ科、ザルツブルク・モーツァルテウム大学ピアノ科・指揮科卒。
ザルツブルク・モーツァルテウム大学大学院、ミュンヘン国立音楽演劇大学でピアノ、指揮、古楽の3科を専攻、研究。
2018年度ヤマハ音楽奨学支援制度奨学生。
2019年よりユンゲ・ドイチェ・フィルハーモニー管弦楽団鍵盤楽器奏者。
ピアノを迫昭嘉、ジャック・ルヴィエ、アンドレアス・グロートホイゼン、指揮をブルーノ・ヴァイル、イオン・マリン、古楽をラインハルト・ゲーベル、
チェンバロとフォルテピアノをクリスティーネ・ショルンスハイムの各氏に師事。
指揮者、ピアニスト、古楽器奏者として、読売日本交響楽団、アンサンブル・アンテルコンタンポラン、パリ警察庁吹奏楽団、マイニンゲン宮廷楽団、
バート・ライヒェンハル管弦楽団など国内外のオーケストラやアンサンブルと共演。
2020年は赤坂離宮迎賓館にて、皇室所蔵のエラールによる内閣府主催のリサイタルを行う。
音楽之友社Webマガジン ONTOMO、ヤマハ音楽振興会Web広報誌などのメディアにて独自連載を受け持つ。

青木尚佳・三井静・大井駿
ピアノトリオコンサート

ミュンヘン・フィルハーモニー管弦楽団メンバーによる
室内楽の調べ

2021年7月27日（火）19:00 開演（18:15 開場）
HAKUJU HALL

協力：日本音楽財団（日本財団助成事業）

ベートーヴェン：交響曲第2番 ニ長調 作品36（作曲者によるピアノ三重奏版）

I. Adagio molto - Allegro con brio
II. Larghetto
III. Scherzo: Allegro
IV. Allegro molto

―休憩―

ブラームス：ピアノ三重奏曲第1番 ロ長調 作品8（改訂版）

I. Allegro con brio - Tranquillo - In tempo ma sempre sostenuto
II. Scherzo: Allegro molto - Meno allegro - Tempo primo
III. Adagio
IV. Finale: Allegro

曲目解説

ベートーヴェン：交響曲第2番 ニ長調 作品36（作曲者によるピアノ三重奏版）

時代はちょうど1800年。
ベートーヴェンが、西ドイツのボンから約900km離れた、オーストリアのウィーンへ拠点を移して8年が経った頃です。
ウィーンでは、ハイドンに作曲を習い、ピアニスト・作曲家としてようやく名が知れ渡ってきたベートーヴェンは、
希望に燃えていました。 交響曲第2番は、そんな時期に書かれた曲です。しかし、この交響曲第2番の作曲中、
ベートーヴェンは、まさにその希望を裏切るかのように現れた難聴の兆しに怯えていました。
1802年には、ウィーン近郊にて、次のような手紙を弟へ宛てて書いています。

私は、友人とくだらない会話をして笑い転げることが大好きだったし、
音楽を聴き、演奏し、曲を作り出すことに幸せを感じていた。
しかし、今では友人と話そうにも、友人の声が私の耳に届かない。
さらに聞き返そうものなら、怪訝な顔をされて、私の心がズタズタになる始末。
何度も死のうと思った。
何度も。
しかし、そんな時に私の心を救ってくれたのは、やはり音楽、芸術の存在だった。
私は、死ねない。
命を救ってくれた芸術に、命を捧げ、尽くす使命があるのだから。

1801年のベートーヴェン

交響曲第2番は、この手紙(ハイリゲンシュタットの遺書)がしたためられた年に完成されました。
ベートーヴェンは、間違いなく、この曲の作曲中に自殺を何度も考えたでしょう。
しかし、ベートーヴェンは迫り来る難聴を、音楽をもって制しようとしたのです。

翌1803年、作曲者自身による初演は賛否両論でしたが、賞賛の言葉も、批判の言葉も、いい意味でこの曲の魅力を
大きく表しています。 特に、ハイドンから学んだであろう、ユーモアが至る所に散りばめられており、「**奇をてらった作品**」
と評されました。
さらに第4楽章については、「**しっぽをバチバチと打ちつける、大蛇のようなモンスターが、最後に叩きのめされる楽章**」
だとも言われましたが、当然でしょう。
ベートーヴェンは、この曲の作曲中、難聴というモンスターと戦っていたのですから。

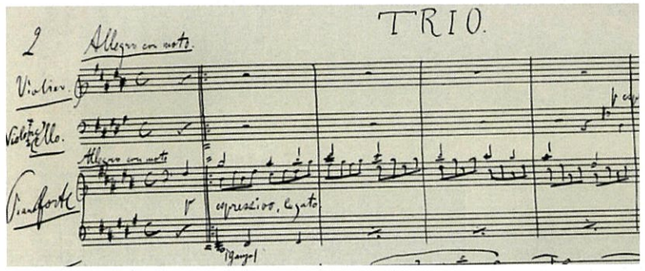
ベートーヴェンは、オーケストラのために書いたこの曲の初演後、ピアノとヴァイオリンとチェロのために編曲しました。
これには、大きな理由があります。
当時はYouTubeもApple MusicもSpotifyもありません。
当時の人たちは、自分がどうしても聴きたい曲があっても、当時の演奏会では同じ曲を頻繁に演奏することがなく、
自分で演奏するか、誰かと一緒に演奏するしかありませんでした。
これによって、忘れ去られてしまった曲、最初の演奏以降、演奏されなくなった曲は数多くあります。
そのため、多くの人たちにもっとこの曲を聴いてほしい、もっと触れてほしい、というベートーヴェンの願いで編曲されました。

古典的な符点のリズム（フランス風序曲のようなリズム）を持つ序奏から始まる第1楽章は、その序奏が終わってから、
矢が放たれたように同音連打が続き、楽章の終わりまで走り抜けます。 第2楽章は、メロディーがウィーンの街中で口笛が
聞こえてくるほど人気を博した楽章で、作曲者の歌心を強く反映しています。 第3楽章は、音の強弱が非常に極端で、
ベートーヴェンのユーモアが手にとるようにわかる楽章です。 そして第4楽章は、焦燥感にあふれる、まさに、のたうち回る
モンスターのようにスリリングな楽章です。
この曲は、ベートーヴェンの大きな転換期に満を持して書かれた、自信と未来への希望に溢れた曲なのです。

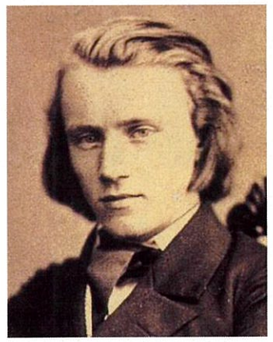
ブラームス：ピアノ三重奏曲第1番 ロ長調 作品8（改訂版）

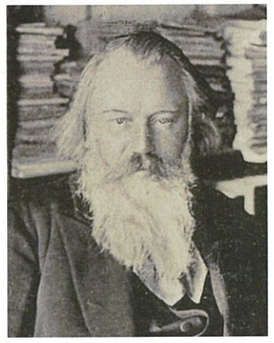
次の曲は、ベートーヴェンの胸像を自分の部屋に飾るほどベートーヴェンを崇拝していた、ブラームスが書いた作品です。
ベートーヴェンが亡くなったのは1827年、ブラームスが生まれたのは1833年です。
そのため、ブラームスはベートーヴェンと面識はありませんでしたが、幼少期よりベートーヴェンの音楽に親しんできました。
ブラームスはベートーヴェンへの想いが強いあまり、ベートーヴェンのモチーフを使った《ピアノソナタ第1番》を作曲。
この曲を、当時有名だった作曲家 シューマンに「頼むから聴いてほしい！」と直談判し、1853年に聴いてもらいます。
ブラームスが20歳のことでした。
シューマンは、若きブラームスが書いた、ベートーヴェン風のピアノソナタを大変評価し、ブラームスの名前を広めることに
尽力しました。

ちょうどこの時に、ピアノ三重奏曲第1番の作曲に取り組み始めます。 まさに、若さと希望に満ち溢れた時期です。
翌年1854年には完成、出版し、ブラームスもたびたびこの曲を演奏したそうですが、完成から34年経った1888年、
思い立ったように、この曲の改訂に取り掛かります。



ピアノ三重奏曲第1番 作品8（1854年初版）、第1楽章冒頭の自筆譜


1853年のブラームス


1890年のブラームス

改訂版では、拍子が変更されたり、主題はそのまま残されたものの、他は省かれるか、全く違う姿に書き換えられました。
特に、冗長な部分を削ぎ落とすことに重きを置いたため、改訂版の長さは、初版の4分の3ほどになりました。
さらに初版では、ベートーヴェンの《遥かなる恋人に寄せて》や、シューベルトの《海辺にて》などが引用されていましたが、
改訂版では全て削除されました。

ブラームスは、この曲の改訂中、クララ・シューマンに「若い頃に書いたピアノ三重奏曲（第1番）を改訂するにあたって、
《作品108》という、新しい作品番号をつけようと思う。」と書き送っています。
元々ブラームスは、かなりの完璧主義者で、過去に書いたものの気に入らなくなった作品は、全て捨てていたため、
ブラームスの習作や、改訂された作品の元々の版はほとんど残されていません。
しかし、このピアノ三重奏曲第1番は、どちらの版もこの世に残そうと決めたのです。 それほどまで、ブラームスはこの曲に
大きなこだわりと思い入れを持っていました。 この曲の改訂には2年かかり、1891年に改訂を終えます。

第1楽章は、長い息のメロディーから始まり、伴奏がシンコペーションを刻み、曲を盛り上げます。 第2楽章のスケルツォは、
ベートーヴェンが頻繁に書いた、速いテンポのスケルツォを継承しています。 第3楽章では、星降る夜を眺めるような、
静かな対話が繰り広げられます。 そして、第4楽章。長調として書かれたピアノ三重奏曲第1番ですが、なんと最後の楽章は
短調なのです。
ブラームスが生涯好んでいたシューベルトの《即興曲 作品90-2》も同じく、長調で始まり、短調で終わるのですが、
その影響を強く受けたように、第4楽章は短調で幕を閉じます。

この曲は、21歳の若いブラームスと、58歳の熟年のブラームスの、「2人」の想いが詰まった曲なのです。

（文・大井駿）